



インターンシップの影響に関する一考察

～大学生1，2年生へのインタビュー事例より～

岩 井 貴 美

要旨 本研究の目的は、インターンシップを経験した大学1，2年生を対象にインタビュー調査を行い、大学低年次におけるインターンシップの影響について考察することである。大学3年生が主流であり、かつ採用を意識したインターンシップが増加する中、大学における1，2年生のインターンシップが、大学の学び、職業意識にどのような影響があるのかを検討した。インタビュー調査の結果、インターンシップの経験後の大学の学びに関しては、授業への関心、資格取得の意欲、専門科目への興味が現れることが分った。また、職業意識に関しては、働くイメージの形成、働き方の探索、業界・企業の選択肢の広がりがみられた。さらに、インターンシップの経験の中で、職場の人々の支援が大きく影響していることが明らかになった。これらの結果は、大学における教育効果のあるインターンシップの在り方に示唆するものである。

キーワード 低年次インターンシップ、大学の学び、職業意識、職場の人々の支援

原稿受理日 2019年5月24日

Abstract The purpose of this study is to examine the influence of internship among university freshman and sophomore on their learning of university and career consciousness. I interviewed 16 university students who were internship experiercer. The results of this analysis show that university freshman and sophomore appear interest of classes and taking of qualifications and specialized subject. As for career consciousness is that show conception of working and the job exploring and expanding option of company. In addition, learning of university and career consciousness was encouraged from supporting of others on internship. This conclusion was suggested how to do university educational internship.

Key words Early internship of university students, Learning at university, Career consciousness, Support from others

1. はじめに

近年、インターンシップは増加の傾向にあり、かつ多様化している。その中で、企業における1日インターンシップの実施が加速している。そのきっかけとなったのが、2017年経団連が、インターンシップは5日間以上とする日数規定をなくし1日から可能としたことである。その理由として、外資系やIT企業は、冬休みにインターンシップを開催し、優秀な学生の囲い込みを行なっているが、一方で経団連に所属している企業は、日数規定により採用活動が不利であることが挙げられたためである。

就職みらい研究所(2019)によると、企業がインターンシップを実施する期間において、2019年度(実施予定含む)最も多かったのが、「1日」であり全体の62.6%と前年度と比べると3.2ポイント増加している。また、学生の参加日数においても同様に「1日」であり、インターンシップに参加した割合が、全体の71.4%と昨年度と比べると5.9ポイントの増加となっている。一方で、1週間以上のプログラムへの参加率が減少傾向にある。このことは、短期間で効率よく企業や業種の理解を深めたい学生の考えが覗えるとしている。さらに、企業がインターンシップを実施する目的に関しては、一番多いのが「仕事を通じて、学生に自社を含め、業界・仕事の理解を促進させる(88.2%)」、つぎに、「入社意欲の高い学生を絞り込む(46.1%)」である。このように、採用を目的としたインターンシップに比重を置く企業が増えてきている状況である。

そこで、本研究は、入学して間もない大学1、2年生に着目し、低年次のインターンシップの影響についてみていく。採用中心のインターンシップが増えていく中で、大学における教育効果のあるインターンシップの在り方を検討していく。

2. 問題意識

若者の就業における問題として、職業のミスマッチ、学校から社会への移行が円滑に行われない状態などが挙げられる。特に早期離職に関して厚生労働省(平成30年)によると、平成27年3月卒業の新規学卒者の卒業3年後の離職率は、大学卒31.8%と2000年以降ほぼ横ばいの傾向にある。また、早期離職の要因の一つに、学生の職業選択の問題が挙げられる。職業選択に関して若松(2012)は、大学生の進路探索行動が十分になされていない事を指摘している。意思決定が遅れる学生は、受け身状態で情報収集や外的活動はほとんど

行っていないのである。

さらに、若松（2012）は、進路の意思決定は容易に決められないし、十分に考える必要があるため、入学の時期から進路に向けて啓蒙、情報収集・吟味が必要であると述べている。また、上西（2007）は、大学におけるキャリア教育には、入学時からの動機づけが重要であり、自ら学ぼうという動機づけ、人と積極的に関わっていかうという動機づけ、積極的に行動しようという動機づけが重要であると指摘している。このように、ますます大学における低年次からのキャリア教育の推進、および、インターンシップの促進が求められている。児美川（2013）によれば、学校の教育課程には多様な「キャリア教育」が埋め込まれている。将来の役割との間に直接的なつながりは見えないが、どこか「キャリア発達」に資する「間接的な学習」と、職場体験（インターンシップ）など、将来の働く者としての役割を実体験させる「直接的な学習」があり、若者の将来のキャリアに対し包括的なキャリア教育のアプローチが必要であるとしている。

しかしながら、一方で、大学生が主体的に自我と職業の探索を求められる重要な時期に、大学生の学業に関する意識の問題として、学業に対するリアリティショックが挙げられる。半澤（2009）は、入学前に抱いていた大学での学業イメージと、入学後に実際に経験した学業の間にはズレがあり、そのズレを学業に対するリアリティショックとした。リアリティショックを受けた学生は、一時的に学業を回避する傾向があることを示唆している。これらの事から、職業選択を主体的に行う人材を育成するには、入学時からの支援が必要であるといわれている。

上西（2007）は、大学生が自ら主体的に考え、行動し、他者に働きかける機会の支援の一つにインターンシップが挙げられ、大学における学びとインターンシップの相互関連は強く意識していると指摘している。また、大学生にとってのインターンシップの意義としては、学習意欲の喚起や主体的な職業選択、職業意識の育成があげられる（文部科学省、平成26年）。つまり、大学1、2年生の早い時期に行うインターンシップが、学生を動機づける環境のひとつと捉えることが出来るであろう。

そこで、本研究は、大学における1、2年生のインターンシップに着目する。年々、インターンシップを実施する企業や大学は増えているが、対象者は大学3年生が主流である。それに伴いインターンシップの研究においても、対象者は3、4年生が多い。よって、大学1、2年生のインターンシップを調査する必要があると考えられる。そこで、本論文の目的は、低年次インターンシップの経験が、大学の学びや職業意識にどのような影響があるのかを調査することである。

3. 先行研究

(1) インターンシップと大学の学び

ここからは、インターンシップと大学の学びに関する先行研究をみていく。亀野（2004）は、工学系大学生とその他を比較し、大学生のインターンシップへの参加目的、参加目的達成度、実習期間、インターンシップの満足度など教育的意義を検討している。研究の結果、参加目的において、ほとんどの学生が就職活動を目的としており、大学での学習や生活向上に関することはあまり重視していないことを明らかにしている。また、参加目的達成度については、就職に関する事項はかなり高いが、学習に関する事項は相対的に低い結果であった。また、河野（2011）は、文系大学生のインターンシップが、大学の学びに与える影響について検討している。インターンシップ経験者は、対人スキルや自己管理能力などが身についたと高く評価しているが、インターンシップに対して、就職面などの功利的な期待が大きく、大学での学びにはフィードバックされていない結果となった。さらに、尾川・甲原（2015）は、短期インターンシップの教育効果について検討している。インターンシップ経験後の意識変化では、自分自身と働くことや学ぶことを関連付けて認識しており、仕事をする上で必要な知識・能力・態度に関する能力観に変化が見られた。さらに、大学において学ぼうとしており、各自の課題を発見・整理し、学習課題を展望するようになった。

また、インターンシップのプログラムから教育効果を検討した酒井（2015）は、職業観の育成については、事前授業におけるグループディスカッションによる効果が大きいことを明らかにしている。学修への意識向上に関しても同様の結果となった。しかし、インターンシップ経験による学生の気づきを大学の学びに結び付けるのが課題としている。さらに、インターンシップの実体験は、職業観の育成や大学での学びよりも能力不足の明確化など、もっと身近な課題への気づきをもたらすと述べている。三浦（2016）は、短期インターンシップの教育効果を分析している。まず、インターンシップ経験者と未経験者の4年間各半期の学業成績の相違を比較した。インターンシップ受講直後の3年前の学力は変化があった。また、進路決定率においてもインターンシップ経験者のほうが高い結果となったが、成績の良い学生がインターンシップに参加した可能性が高く、学習意欲や就業意欲に効果があるかは明らかにされていない。

これらの研究は、大学生の視点に立ち、インターンシップの経験により、大学での学び

に対しどのように大学生の意識が変化をするのか検討している。しかし、対象者が3年生中心であるため、1，2年生において大学の学びに同じような変化が現れるかは分からない。

(2) インターンシップと職業意識

つぎに、インターンシップと職業意識に関する先行研究をみていく。古田（2012）は、インターンシップ経験とサークル活動が、就職活動生のキャリア適応力に及ぼす影響を検討した。学生時代にサークル活動に注力した者よりも、注力しなかった者の方が、インターンシップ経験を通じてキャリア自信を高めることを明らかにした。また、学生時代の諸活動（学業、アルバイト、サークル活動）が、キャリア自信に正の影響を及ぼすことを明らかにした。また、就職活動生を中心に、インターンシップの形態による能力の進捗を検討した研究において、真鍋（2010）は、日常業務型と課題設定型2種類のインターンシップの経験による社会人基礎力の伸長と、就職活動への活用状況の分析を行った。社会人基礎力伸長調査では、双方においてインターンシップの効果が明らかとなった。また、就職活動への活かし方調査では、活かし方にそれぞれ違いが見られた。さらに、インターンシップと職業レディネスの関連性について松山・飛田（2008）は、インターンシップの形態を「講座型」、「同行型」、「実務型」の3つに分類し分析を行った。職業レディネスを高めるには、実務型のインターンシップが効果的であり、さらに、自己概念の形成が職業レディネスを高めることを明らかにした。高良・金城（2001）は、職業レディネスと進路選択に対する自己効力感を用いて、インターンシップの前後で大学生の就業意識がどう変化するかを検討した。インターンシップに対して満足度の高い者は、低い者に比べて事後調査において有意に高くなっていた。これらの研究は、インターンシップ経験を介してキャリア意識への影響やインターンシップの形態によるキャリア意識の変化の違いを明らかにしている。また、インターンシップを介しての能力の伸長を検討している。しかし、これらの研究の対象者は就職活動生が多く、参加目的が職業選択に絞られており、すでに進路探索行動が自発的に行われていると考えられる。

4. 調 査

(1) 調査1 インターンシップ経験者と未経験者の比較

大学1，2年生の学業への意欲低下状態を測定する指標として、大学生活に対する期待

度を点数で回答してもらった。大学入学前に描いていた期待度を100点とし、入学直後の点数と後期授業期間の点数を回答してもらった。第2次調査対象者1, 2年生ならびに、インターンシップ未経験者1, 2年生を対象に調査を実施した。実施期間は、2016年11月下旬～12月上旬である。図1は、大学生活に対する期待度（平均点数）をグラフで表したものである。インターンシップ未経験者の入学直後の点数平均は69.2点、現在の点数平均は68.9点とほぼ同じ点数で大きな変化はみられなかった。一方、インターンシップ経験者の入学直後の点数平均は68.8点、現在の点数平均は74.0点と大きな変化がみられた。それぞれの平均値の差を、t検定で検討した。その結果、インターンシップ未経験者は有意差がみられなかったが ($t(298), p=0.93$)、インターンシップ経験者は、入学直後の点数に比べ現在の方が期待度の点数が有意に伸びていることが分かった ($t(166)=-2.23, p<0.05$)。

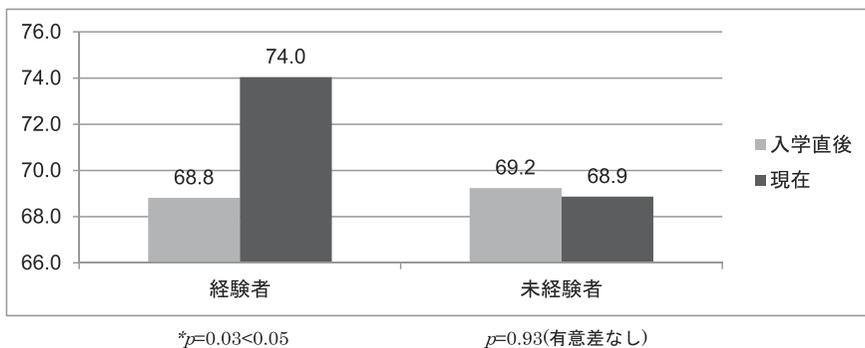


図1 大学生活に対する期待度の比較 (点数)

(2) 調査2 インターンシップ経験者のインタビュー

インターンシップ経験者を対象としたインタビュー調査を行った。先行研究を踏まえ、低年次インターンシップの経験により、大学の学びや職業意識にどのような意識変化が起きているのか具体的に探る。

調査概要

近畿大学経営学部キャリア・マネジメント学科で、「ビジネス・インターンシップ」を受講している1年生と2年生を対象に調査を実施した。2016年9月下旬～10月中旬の間に、インターンシップを修了した1年生と2年生、男子7名、女子9名の合計16名にインタビューを実施した。インタビューにあたっては、学生に本研究の目的を説明し承諾を得た。

また、許可を得て IC レコーダーで録音と筆記による記録を行い、内容を文章化した。インタビューは半構造化方式で40分程度である。調査内容は、インターンシップで学んだこと、誰から影響を受けたか、インターンシップ後の学校生活の変化、職業選択や学びへの影響などである。表1は、調査対象者の概要である。

表1 調査対象者の属性

対象者	性別	学年	派遣先企業	
1	Aさん	女性	1年生	IT企業
2	Bさん	女性	1年生	IT企業
3	Cさん	女性	1年生	外資系小売り
4	Dさん	女性	1年生	外資系小売り
5	Eさん	女性	1年生	外資系小売り
6	Fさん	男性	1年生	大手百貨店
7	Gさん	男性	1年生	IT企業
8	Hさん	男性	1年生	外資系小売り
9	Iさん	女性	2年生	製造メーカー
10	Jさん	女性	2年生	外資系小売り
11	Kさん	女性	2年生	外資系小売り
12	Lさん	女性	2年生	外資系小売り
13	Mさん	男性	2年生	IT企業
14	Nさん	男性	2年生	外資系小売り
15	Oさん	男性	2年生	外資系小売り
16	Pさん	男性	2年生	外資系小売り

(3) 調査結果

まず、低年次インターンシップの経験は、大学の学びにどのような影響をもたらしているのであろうか。図1で表された様に、大学1、2年生は学業的リアリティショック、無気力学生が多いと思われるが、低年次インターンシップの経験をすることで、大学の学びがどのように変わっていくのかみていく。

大学の学びの変化

マネジャーから会議も全部英語でやるのを聞いて、英語が大事だなと思いました。この企業に関わらず他の企業も絶対に大事だなと思い、英語に力を入れ頑張ろうと思いました。まだ、決まってないですが2回生から何か始めようと思います。(Eさん)

TOIEC は、ずっとやらなければいけないと思っていました。インターンシップがきっかけで、英語の授業は頑張る様になりました。簿記の講義も申し込みました。インターンシップに行っていなかったら、TOIEC も簿記の勉強もやってなかったと思います。(Fさん)

このインターンシップで学んだことは、プレゼンテーションの発表は、回数だなと思いました。実は、発表の多い授業は避けようと思っていたのですが、行こうという気持ちになりました。(Gさん)

今までは、授業の内容を聞き流していたというか、あまり自分の中にしみてなかったのです。でも、インターンシップで出会って、改めて大人の人は偉大だなと思いました。その後、先生の話聞いても、すごく話がしみたし、お父さんも仕事をしているので、仕事の話聞いたりしてすごいなと思った。今までは、聞けても先輩とか学生なので、自分が知っている範囲も社会人1年生なので、インターンシップで初めて、社会人の生の意見や人生経験をしっかり聞けて、なんか深いなあと思いました。(Lさん)

ちょっとあせてきたっていうのがあります。今1回生が終わって2回生でインターンに行ったのですが、気付いたら今の状態で、はっきり何かをしたと言えることが全然ないです。淡々と毎日過ごしている感じがしていて、インターンシップ行った後、最近焦ってきました。やっとな最近、ゼミでがんばろう、変ってみたいなと思っています。インターンシップ行くまでは、単位さえとれて卒業さえすればいいやと思っていたが、企業で色々な人や一緒にいった仲間からいろんな刺激をもらいました。(Oさん)

マネジャーの方から、自分で努力しないと上にあがれない企業なので、英語も学ぶ様になったのを聞いて、すごいなあと思い、自分で動かないとダメだと思った。社会の事、就職の事を勉強したいと思いました。どんな企業があるとか、もうちょっと知りたいと思いました。インターンシップに行かなければ、企業にも興味わかなかつたし、必要だなと思っていたけど TOIEC を受けるのも先延ばしにしていたし、来年もインターンシップに行きたいと思わなかったかもしれません。自分でもびっくりしています。(Dさん)

マネジャーから、人生の先輩のように仕事以外の事も話してくれて、すごく聞き入ってしまいました。大学に入学する前は、「あれを勉強しよう、これを勉強しよう」と思っていたのですが、実際に入学すると、授業よりも友達や遊びが大事と思うようになりました。3回生になったらマーケティングや消費者行動論を学びたいと思いました。ゼミもマーケティング関連に行きたいと思いました。インターンシップでお客様調査を経験していなければ、ゼミの今の学科のゼミを選択していたと思います。（Nさん）

このように、1，2年生の段階では、Gさんのように学びの機会を回避する、LさんやOさん、Nさんのように、学習意欲が低下している状態や、入学前に抱いていた大学生活への期待とのギャップによる意欲低下状態がみられる。しかし、インターンシップが、大学生活を客観的に見つめ直す動機づけとなり、大学の学びが喚起されている。さらに、普段の大学生活では出会わない職場の人々により、社会人の仕事の価値観やこれまでの経験談、人生の先輩としてのアドバイスにより、大学生活や自分の将来について改めてじっくり考える機会と時間が与えられている。

職業意識の変化

つぎに、低年次インターンシップが職業意識にどのような変化をもたらしているのかみていく。大学1，2年生は社会の知識や経験が乏しく、働くこと自体が不透明であるため働くことに対するの考えを見つけ出すのは非常に難しいと推測される。

働く事のイメージが出来てなかったです。今回働くイメージが出来たので、まだ、何をするとか、何で働くとか、ぜんぜん決まっていけれど、ちょっと頑張って見つけて、自分のやりたいこと、したいことで働けたらいいなと思いました。あと、働く人はかっこいいなと思った。実習先で指導してもらった社員さんみたいに働けたらいいなと思った。（Bさん）

自分がどんな仕事をしたいのか全く決まっていなかったのですが、マネジャーが、「非日常の仕事がしたくて、非日常が百貨店だった」ということを聞きました。僕もアルバイトがレジャー関係で非日常なので、自分も「非日常」が好きなのかなと思い、将来の職業選択に旅行会社とか考えました。マネジャーへのインタビューでヒントを頂きました。自分の働く事への基本的な考えがなかったのですが、それが分かりました。（Fさ

ん)

大手の会社がすべてではないと思いました。インターンシップに行くまでは、給料の高いところ、親からも有名企業に行けと言われていたので、働く企業を決めるのは、給料、有名かだけだと思っていました。あまり考えてなかったのですが、インターンシップを経験して、やりがいや成長できる企業で働きたいと思いました。色々な企業をみたいと思っています。(Nさん)

前までは、普通に名前の知れている企業で、最初は営業とかしてと思っていた。今回販売業務を経験して、面白いなと思った。企業で名前が有名なのも大事ですが、楽しく働くというか、今回の企業みたいに、上司との上下関係が厳しくなく、部下でも提案がだせる、部下もちゃんと企業の一部に参加できる働き方がいいなと思った。(Oさん)

インターンシップ行く前は、本当に自分のやりたいことが見つからなくて、何をしたらいいのかわからないと思い過ぎていました。将来の事も自然に見つかると思って特に考えてなかったのですが、インターンシップに行ってからちょっと考え方が変わって、特にやりたいことが、見つかったわけではないけど、見つかるのを待つんじゃなくて、自分から見つけていこうかなと思うようになりました。(Eさん)

業界とか仕事とか知らなかったのですが、今回、メーカーと商社の違いが分かったので、どちらも面白いなと思いました。私は、何事にも興味津々になるタイプで、テレビ業界も少し気になっています。友達がテレビ局でバイトしていて、今度見学に行こうと思っています。インターンシップで、営業というのが分かったから、今度はこちらを調べてみることにしました。一步踏み出せた感じです。(Iさん)

家具や雑貨が好きでこの企業に行ったのですが、売る方じゃなくて作るとか、企画することをやりたいと思いました。マネジャーの人の話を聴いて、イベントを企画し、どうやったら売れるようにするか、家具を配置して、そういう仕事も面白そうだなあと思いました。就職もその方向で考えようと思った。来年もインターンシップにいきたいと思っています、ちがう業界もみてみたいと思いました。(Jさん)

このように、大学1，2年生の段階では、Fさんのように将来の職業について全く決まっておらず、また、NさんやOさんのように、身近な親からのアドバイスで、有名な大企業に就職することが安心だと考えている。しかし、インターンシップの経験で、企業で働く人の考えに接し企業文化や理念などを体験することで、職業選択について考え始めるきっかけとなり、自分なりの働き方を模索し始めていると考えられる。また、希望する業界や職種をまだ絞り込めてはいないものの、EさんやIさんのように職業選択に対して、受動的な行動から能動的な行動に変化している者も見られる。また、IさんやJさんは、興味のある業界や業種も広がり、さらに、仕事内容を知るために自主的に動き出そうとしている。

(4) インターンシップによる低学年の大学の学びと職業意識の変化プロセス

今までのインタビュー内容から、低年次インターンシップによる大学1，2年生の大学の学びと職業意識の変化を図示する（図2）。まず、大学の学びの変化は、大学1，2年生に多く起こりうる学業に対するリアリティショックなどが原因で、学習意欲の低下がみ

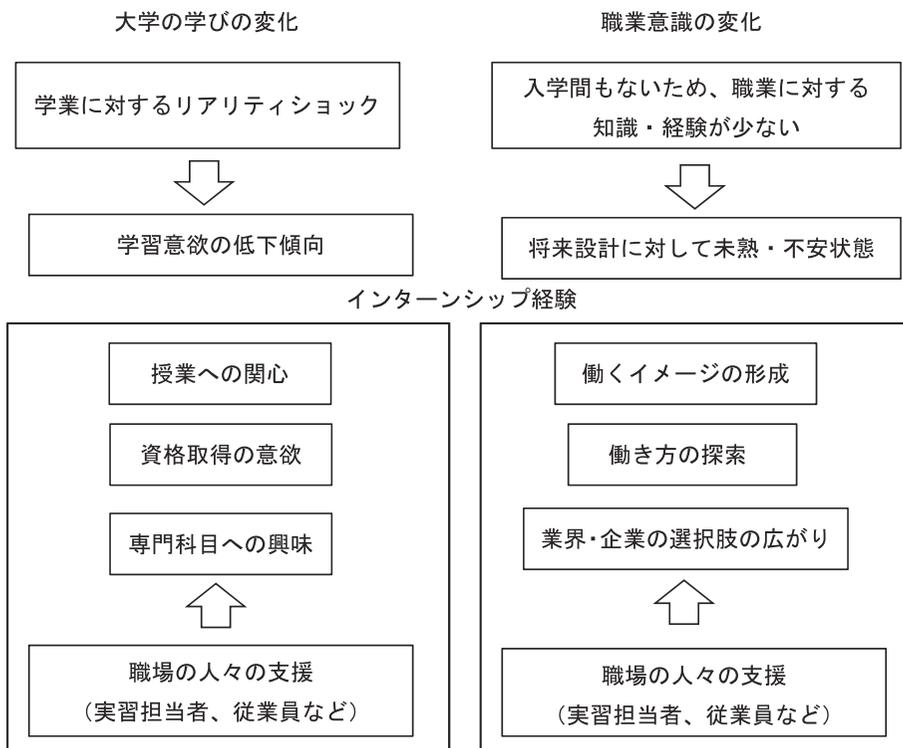


図2 インターンシップによる低学年の大学の学びと職業意識の変化（筆者作成）

られる。しかし、インターンシップを経験することで、「授業への関心」、「資格取得の意欲」、「専門科目への興味」がみられる。また、職業意識の変化については、低学年は入学して間もないため、職業に対する知識や経験が少ない。よって、将来設計に対して未熟であり、不安な状態と考えられる。しかし、インターンシップを経験することで、「働くイメージの形成」、「働き方の探索」、「業界・企業の選択肢の広がり」などがみられた。さらに、インターンシップの中で、職場の人々（実習担当者、一緒に働く従業員など）の支援が、大学の学び及び職業意識に大きく影響していると思われる。

5. 考 察

本研究は、インターンシップが大学1，2年生の大学の学びと職業意識にどのような影響を及ぼすのかみてきた。まず、インターンシップ経験者と未経験者の大学に対する期待度の比較を行った。インターンシップ未経験者は、入学直後、後期期間とほとんど変化はなかった。一方、インターンシップ経験者は、大学に対する期待度が上昇しており、インターンシップの経験が影響している可能性があることが示された。

つぎに、インターンシップを経験した1，2年生16名にインタビューを行った。まず、大学の学びに関しては、学業的リアリティショックによると思われる学習意欲の低下状態の学生が多く見られた。しかし、インターンシップの経験が大学生活を客観的に見つめ直す動機づけとなり、大学の学びが喚起されていると考えられる。さらに、大学の授業内容や自分自身の授業に対する考えや態度を改める機会となっている。つぎに、職業意識については、調査対象者が1，2年生であるため、ほとんどの学生が職業選択に対して受動的であり、親のアドバイスを基本に考えている状態であった。しかしながら、インターンシップを経験することで、企業で働く人の考えに接し、企業文化や企業理念を体験し、働く上でのアドバイスをもらうことで、職業選択について考え始め、自分なりの働き方を模索し始めていると考えられる。

これらの結果から、低年次インターンシップへの提言として、以下の3点を挙げる。

まず、第1に、大学に対する期待度が、入学直後に比べ、インターンシップ後に上昇していることが示された。実際、入学前に抱いていた期待が入学後に裏切られ、学業に対するリアリティショックを受け、一時的に学業を回避している学生は多いと考えられる。自我と職業を探索する大事な時期に、ただ何となく、目的もなく大学生活を送ってしまっている状態である。大学1，2年生の時期は、インターンシップのような、自己を振り返り、

自ら動き出すなどの自律性を促す動機づけの環境が必要であるのかもしれない。

第2に、インターンシップによる大学の学びへの影響についてである。大学に対する期待度のグラフ（図1）ならびに、インタビュー調査の結果から、学習意欲の低下状態の学生が多く見られた。しかし、インターンシップがきっかけとなり、授業への関心、資格取得の意欲、専門科目への興味が示された。すなわち、インターンシップが大学の学びに対する一つの動機づけであることが考えられる。さらに、大学1，2年生の授業内容は、基礎的な科目が多いため、知識を吸収する受動的な学習が多いといえる。よって、個々の学生に対して客観的な意見や考えを与える、自主性を高めてくれる職場の人々の支援は、大学生に気付きや新しい視点を与え、大学の学びに影響を与えているのであろう。

第3に、インターンシップと職業意識についてである。職業意識に関しては、大学1，2年生は社会経験がほとんどなく、職業に関する情報収集をどのように行うのか皆無に等しい状況である。そのため、ほとんどの学生が職業選択に対して受動的であり、インターンシップの機会は、社会を知るための学びの場と捉えていると考えられる。よって、インターンシップの場で、希望する業界・企業や職種を絞り込む段階ではないと考えられる。さらに、職場の人々からの支援を通し、彼らを社会人のモデルと捉えイメージして、自己のキャリア形成を行っていくのであろう。

さらに、職場の人々の支援が大学の学びや職業意識に大きく影響していると考えられる。すなわち、インターンシップにおける実習担当者や一緒に働く従業員の支援そのものが、自己を振り返り大学生活を見直そうとする機会になるのであろう。特に、仕事に関する支援以外に大学時代や職歴の話、大学生活へのアドバイスなど、直接実習内容とは結びつかない支援が、大学1，2年生において今後の大学生活全般において見直そうとする意識に影響があると考えられる。

6. まとめと今後の課題

これまで本研究では、大学1，2年生の低年次インターンシップの影響を明らかにしてきた。ここでは、総合的な考察と今後の課題について述べる。近年、インターンシップに関する多くの研究はあるが、大学1，2年生のインターンシップについて明らかにした研究は、筆者が調べた範囲ではほとんど見つかっていない。そこで、本研究は、インターンシップと大学1，2年生の大学の学び、職業意識について考察した。まず、大学1，2年生は、学業に対するリアリティショックによる意欲低下状態の学生が多いが、インターン

シップを経験することで、大学に対する期待度が上昇することが示された。また、大学1、2年生がインターンシップを経験することが動機づけとなり、大学の学びや職業意識が促進されることが示された。つぎに、インターンシップにおける実習内容以外で、職場の人々の支援が大学の学びや職業意識に影響を与える可能性が分かった。

近年、就職活動解禁時期の変更により、会社説明会を兼ねて、秋・冬以降にインターンシップを開催する企業が増えてきている。大学3年生が主流のインターンシップには、「就職活動」という大きな目標がある。そのため、インターンシップの目的が、業界の見極めや職業適性に集中する。だが、一方で、大学1、2年生のインターンシップ経験は、社会の仕組みや職業選択などを学ぶ以外に自ら学ぼうとする動機づけとなり、学業に対し意味づけを行い、今後の大学生生活に自らコミットする効果があると考えられる。即ち、このような環境において、主体的な職業選択が行える人材を育成できるのではないだろうか。さらに、大学1、2年生からのインターンシップの必要性が徐々に注目される中、本研究の結果は、大学における低年次キャリア教育としてのインターンシップのあり方や、大学生の大学適応の問題に示唆を与えるものであると考えられる。

最後に、今後の課題について述べておきたい。本研究の調査は、低年次インターンシップと大学の学び、職業意識の変化を見出したが、今後はさらに、量的調査の検討が求められる。また、本研究はインターンシップ後の検証であるため、今後は、インターンシップ前後における意識変化の比較調査など、詳細に検討していくことが求められる。

参 考 文 献

- 古田克利 (2012) 「キャリア自信に対するインターンシップ経験とサークル活動の交互作用効果—就職活動中の大学生に対するアンケート調査の分析を通じて—」『インターンシップ研究年報』第15号, p.9-16
- 半澤礼之 (2009) 「大学1年生における学業に対するリアリティショックとその対処—学業を重視して大学に入学した心理学専攻の学生を対象とした面接調査から—」『青年心理学研究』第21号, pp.31-51
- 亀野淳 (2004) 「インターンシップにおける教育的意義」『工学教育』第52巻第4号, pp.25-29
- 河野志穂 (2011) 「文系大学生のインターンシップが大学での学びに与える効果—早稲田大学を事例として—」『インターンシップ研究年報』第14号, pp.9-15
- 厚生労働省 (平成30年) 「新規学卒者の離職状況」
- 高良美樹・金城亮 (2001) 「インターンシップの経験が大学生の就業意識に及ぼす効果—職業レディネスおよび進路選択に対する自己効力感を中心として—」『人間科学』第8号, pp.39-57
- 児美川孝一郎 (2013) 『キャリア教育のウソ』筑摩書房
- 文部省, 通商産業省, 労働省 (平成9年) 「インターンシップの推進に当たっての基本的考え方」
- 文部科学省 (平成26年) 「大学におけるインターンシップの推進について」

インターンシップの影響に関する一考察（岩井）

- 文部科学省（平成26年）「インターンシップの推進に当たっての基本的考え方」
- 松山一紀・飛田浩平（2008）「大学生の職業意識とインターンシップの関係」『商経学叢』第55巻第2号，pp.427-442
- 真鍋和博（2010）「インターンシップタイプによる基礎力向上効果と就職活動への影響」『インターンシップ研究年報』第13号，pp.9-17
- 三浦一秋（2016）「インターンシップの教育効果についての分析—学習意欲向上効果と就業意欲向上効果の観点から—」『インターンシップ研究年報』第19号，pp.1-9
- 尾川満宏・甲原定房（2015）「短期インターンシップの教育効果とは何か？—参加学生を対象にした意識調査の分析から—」『山口県立大学学術情報』第8号，pp.41-50
- 酒井理（2015）「インターンシッププログラムの教育効果：職業観形成の視点から」『生涯学習とキャリアデザイン』第12号，pp.25-36
- 就職みらい研究所（2019）「就職白書」
- 上西充子（2007）「大学におけるキャリア支援：その動向」上西充子（編）『大学のキャリア支援—実践事例と省察—』経営書院，第1章，pp.24-76
- 若松養亮（2012）「決められないのはなぜか」若松養亮・下村英雄（編）『詳解 大学生のキャリアガイダンス論』金子書房，第3章，pp.27-42